

寄稿

# 学生が自ら学びあえる 学習コミュニティをデザインする

## — ICTを活用した学びの場づくりを考える —



ネットワーク情報学部講師 望月 俊男

ICT(情報コミュニケーション技術)を用いて、学習者自らが自律的に学ぶと同時に、周囲と協同して学びの輪を広げる協調学習支援を研究する、望月俊男ネットワーク情報学部講師から、新しい学びの形について、寄稿していただいた。

「アサカツ(朝活)」という言葉をよく聞くようになった。よく報道で見かけるのは、若手社会人同士の自主勉強会や「丸の内朝大学」のようなスクールでのアサカツだ。勉強したことや仕事のプランを発表しあっているいろいろな意見ももらったり、情報交換を行うことを通じて新たな人脈やビジネスチャンスを創る場となっている。

こうした学びあいは、小学校以前・社会人以後には普通に行われている。だが中学以後大学までは「勉強は一人です

る」「知識は授業で先生に教えてもらう」という学習観が定番だ。

だがグローバルな視点からみたとき、こうした学習観は古いものとなりつつある。知識や情報が爆発的に増加し、専門性が深く多岐に分かれ、大学を卒業した後も自ら学び続けるのは当然、学習者が自分で学ぶべきことを判断し、他者と学びあえる共同体(コミュニティ)を見つけて参加したり、創ろうとする力や姿勢を身につけることが、激動の世界で生き残る必要条件になりつつある。

り他のメンバーに協力しようとするなど、グループ学習への貢献を促すことが

分かってきた。

### ■ 離れた仲間と学びを見せあう

大学の学びの場は、企業研修や教育実習、社会に出て奉仕活動を行うサービラーニングなど、学外の多様な場に展開するようになってきている。多くの場合、現場にはそれぞれ1、2名の学生が赴き、現場の方々にご指導いただきながら学習を進める。だが企業で働く・教育現場で働く職業意識や、市民責任について総合的に理解するには、体験するだけでなく、仲間とさまざまな経験を共有して、省察することが重要な活動になる。このように物理的に離れた学生の経験や省察をお互いに見えるようにして共有するのにICTは有効だ。

した場合や悩みを持った時に、実習生はすぐに大学の担当教員や学友と相談できるといった効果をねらってデザインされている。

3年間こうした授業を行っているが、多くの実習生が実習体験を報告するだけでなく、助言や励ましあいの活動を行っている。先陣を切って実習に赴いた学生は、毎日のように熱心に実習生活を報告し、後発の実習生にとって参考になるようだ。実習を終えた学生も、まだ実習中の学生の日記を見て意見や助言、励ましを行っている。

特徴的なのは「気持ち的に救われる部分があった。また、みんなも大変なんだと思った」といった情動的な支援をメリットとして挙げる感想が多く見られることだ。同じ悩みや問題を持ち、共感しあえる人々が、共通する目標に向かって支援を授けあうグループ(セルフヘルプグループ)はストレス軽減や健康維持に効果的だと言われるが、学外実習のように非日常の学びの場でもこうした相互支援が学びに有効なことが分かってきた。

### ■ 大学での学びあいを支援する

筆者の所属するネットワーク情報学部では、3年次生が自ら興味、関心や問題意識を持って集まり、場合によっては担当教員をスカウトして、関心の追究や問題解決に取り組む「プロジェクト」がある。他学部でも「ゼミナール」や「課題解決型インターンシップ」などでグループ学習が行われている。学生にとっては、社会に出てからも自律的に学び続ける姿勢を身につける場となるだろう。

と同じ場を長く共有することが困難だ。学生はアルバイトや課外活動に忙しいのに、授業時間外にも協調活動を求められても、どのように貢献したらよいか分からなくなることもあるだろう(もとの意欲はさておき)。こうした場合の学びあいの仕方をよく知らない学生には、足場かけとなる学習環境のデザインが必要だ。

放送大学ICT活用・遠隔教育センターで無償配布するグループウェア「ProBo」は一つの解決策となるだろう。このグループウェアは大学生のグループ学習向けに開発されており、筆者もプロジェクトに参加している。主な特徴として①グループのメンバー同士の役割分担や分担した作業の進捗が見える②メンバーが作業した成果物のファイル

筆者が担当している「教育実習」では、かの有名なミクシィのようなソーシャルネットワーキングサービス(SNS)を立ち上げ、実習生同士がウェブ日記を書きあう教育実践を行っている。ウェブ日記は実習生たちだけが閲覧できる。実習生には2、3日に1度程度、日記を書いたり他の実習生の日記を見たりするように指示をし、相互にコメントを付けあうことも奨励している。また、あえて実習校や大学に提出する「実習日誌」の枠に書けない日々の由無し事を書くことを奨励した。

こうした場は、①他の実習生のさまざまな体験を共有したり、参考にできる②実習日誌の枠に収まらない体験の省察を即時に行える③現場で問題に遭遇



▲ 近日配布開始予定の新しいProBo (http://pb.code.ouj.ac.jpで無償配布)



▲ 携帯電話で使えるProBoMobile

した成果物のファイル共有できる③掲示板やチャットで連絡できるといった基本的なグループウェアの機能のほか、④クラス他グループの進捗状況や作業内容を見られる機能もあり、学生はウェブブラウザを使って簡単に利用できる。大学生が活用する携帯電話からもアクセスできる機能も提供する予定だ。

通学の電車や自宅で何となく携帯電話からアクセスすれば、メンバーお互いの進捗状況を簡単に理解できる。他のグループに比べてどの程度進捗の差があるか、といったこともパッと見て分かる。緊急の必要があればケータイのメールや電話を使ってメンバーと相談できる。作業したファイルを瞬時に共有し、自宅からインターネット電話で会議をしながら協同作業を進めることもできる。

授業に導入してみると、学生同士がお互いに進捗状況を把握して、見通しを持って学習を進められるという効果がみられたほか、グループ間・グループ内でお互いに進捗状況や役割分担を把握することで、学生がそれぞれの責任を確認した



▲ 教育実習中のSNSの日記

### ■ 学びの輪を広げる・つなぐICT

ICTを活用して学友の活動の様子を互いに見えるようにすると、学生たちが学びあいの中で①学びの責任を持つ②学びの経験を共有して考えを深めるといった学習課題に関する効果だけでなく、③一緒に学ぶ人を慮る④一緒に学ぶ人に励まされるといった共感的な効果が高まり、それが学びを促している点は興味深い。協同する人に配慮しながら適切な支援を得て自律的に活動するという、社会で活躍する上でのコンピテンスを育む手

助けになる可能性が、こうしたテクノロジーにはあるのかもしれない。

最近ではツイッターなど、人と人をつなぐソーシャルメディアが目玉され、その特性を利用した学習サービスも始まっている。私たち大学人もこうしたICTの特性をうまく活用して、卒業生や地域の人々、ご家族など、さまざまな人が学びを深められる学習コミュニティを積極的にデザインしなければならない時期にきているのではないだろうか。

### もちづき・としお

ネットワーク情報学部講師。総合研究大学院大学文化科学研究科メディア社会文化専攻博士課程修了。博士(学術)。日本教育工学会などに所属。2009年4月からNHK教育「情報A」講師を務める。主な担当科目は、情報科教育論、教育支援情報システム総論・各論ほか。